百々裏話（1）

おもてあきら

翁「とうとうたらり」で初まる翁の謡は初春の清々しさにぴったりで、意味が解らぬながらも気持のよいものだ。ところが下懸りの金春流や喜多流では「どうどうたらり」と謡う。「とうとう」の文句は翁の中に幾度も出てくるが、冒頭以外の部分も、少しは清んで謡うが、大半は「どうどう」と濁つて謡うのである。「とうとうたらり」を聞きなれた観世流謡曲ファンの耳には、「どうどうたらり」では何だかきたならしく感じられるのではなかろうか。だが、「とうとう」の方が感じがよいからと言つて、下懸り諸流で「どうどう」と謡う事実を無視する事は出来ない筈だ。翁の文句については、咒文説、楽の譜を口で唱える声歌であるとする説、さてはチベット語だと言う珍説まであるが、殆どの説は「とうとう」で考えられており、「どうどう」は顧みられていない様だ。一体「とうとう」と「どうどう」はどちらが古い謡い方なのであろうか。

翁の咒文めいた文句を伝えた最古の資料は能勢先生が能楽源流考に紹介された「法華五部九巻書序」（大治元年八百三十二年前）で、これには翁の全文が掲載されているが、「とうとう」の部分は「皮々」「皷々」「とふ〳〵」と三通りに書かれている。「とふ〳〵」は前述の様に「どふ〳〵」の濁点が無いものかも知れないし、皮も皷も宛字であるから、どう謡つたのか見当がつかない。ただ皮は皷、皷は鼕の宛字と考えれば、鼕の音は「トウ」である。寛永頃には出来上つていた「実鑑抄」には明瞭に「鼕々」とあるから、江戸初期には「とうとう」と謡つていたらしい事がほぼ推測される。ところが金春流の方ではこの頃既に「どうどう」と謡つているのである。結局、文献によつて「とうとう」と「どうどう」の先後を決定する事は、現在では不可能な様である。

ただ、どちらかと言うと下懸り諸流の方に古い形が多く残され、観世流は進歩改革を常とした流儀であると言う一般的傾向から推して、「どうどうたらり」の謡い方が古いのではなかろうか。「とうとう」を「どうどう」と濁つたと考えるよりは、「どうどう」と濁つて謡うのを嫌つて「とうとう」と清んで謡う様に改めたと見る方が、可能性が多かろう。そして同じ上懸りの宝生流が「とうどうたらり」と謡うのが、その過渡期的な中間の謡い方ではなか

部九巻書序」（大治元年八百三十二年前）で、これには翁の全文が掲載されているが、「とうとう」の部分は「皮々」「皷々」「とふ〳〵」と三通りに書かれている。「とふ〳〵」は前述の様に「どふ〳〵」の濁点が無いものかも知れないし、皮も皷も宛字であるから、どう謡つたのか見当がつかない。ただ皮は皷、皷は鼕の宛字と考えれば、鼕の音は「トウ」である。寛永頃には出来上つていた「実鑑抄」には明瞭に「鼕々」とあるから、江戸初期には「とうとう」と謡つていたらしい事がほぼ推測される。ところが金春流の方ではこの頃既に「どうどう」と謡つているのである。結局、文献によつて「とうとう」と「どうどう」の先後を決定する事は、現在では不可能な様である。

ただ、どちらかと言うと下懸り諸流の方に古い形が多く残され、観世流は進歩改革を常とした流儀であると言う一般的傾向から推して、「どうどうたらり」の謡い方が古いのではなかろうか。「とうとう」を「どうどう」と濁つたと考えるよりは、「どうどう」と濁つて謡うのを嫌つて「とうとう」と清んで謡う様に改めたと見る方が、可能性が多かろう。そして同じ上懸りの宝生流が「とうどうたらり」と謡うのが、その過渡期的な中間の謡い方ではなか

次に古い資料は慶長頃（約三百六十年前）に出版された「八帖花伝書」で、これには翁の全文が掲載されているが、「とうとう」の部分は「皮々」「皷々」「とふ〳〵」と三通りに書かれている。「とふ〳〵」は前述の様に「どふ〳〵」の濁点が無いものかも知れないし、皮も皷も宛字であるから、どう謡つたのか見当がつかない。ただ皮は皷、皷は鼕の宛字と考えれば、鼕の音は「トウ」である。寛永頃には出来上つていた「実鑑抄」には明瞭に「鼕々」とあるから、江戸初期には「とうとう」と謡つていたらしい事がほぼ推測される。ところが金春流の方ではこの頃既に「どうどう」と謡つているのである。結局、文献によつて「とうとう」と「どうどう」の先後を決定する事は、現在では不可能な様である。

ただ、どちらかと言うと下懸り諸流の方に古い形が多く残され、観世流は進歩改革を常とした流儀であると言う一般的傾向から推して、「どうどうたらり」の謡い方が古いのではなかろうか。「とうとう」を「どうどう」と濁つたと考えるよりは、「どうどう」と濁つて謡うのを嫌つて「とうとう」と清んで謡う様に改めたと見る方が、可能性が多かろう。そして同じ上懸りの宝生流が「とうどうたらり」と謡うのが、その過渡期的な中間の謡い方ではなか

次に古い資料は慶長頃（約三百六十年前）に

ろうか。冒頭以外の「とうとう」について見ても宝生流は「どうどう」が多く、下懸りに近い。

こんな訳で、私は「どうどうたらり」を観世流が「とうとう」と改めたと考えたいのであるが、神聖視され、儀礼化されてきた翁には、「とうとう」と謡う方がふさわしく、この改訂は成功していると言えよう。

翁の謡本には古写本が殆ど無く、室町期筆と思われる本を見た事が無い。観世流版本では寛永十八年二月刊行の「式三番」と題する本が最も古いらしいが、これと同版で末に三番叟の文句を加えた慶安三年二月道伴本には使用者が「どう〳〵」と濁点をつけてあつた。

嵐山　嵐山は金春禅鳳作らしい。つまりもともと金春流の能である。その為か観世流の古写本には嵐山が見つからない。他座で創作した能を別の座で演ずるには、著作権の無かつた昔でも相当の年月が必要だつたらしい。或は流儀間の対抗意識が許さなかつたのであろうか。観世流刊本としては、明暦三年野田本を初め、いつも外百番本に加えられているが、詞章は現行曲と殆ど変らない。金春流謡本では車屋本(吉川小本)が一番古いものであろうが、その詞章は現在の金春流と殆ど同じである。観世と金春を比較すると、セリフの部分にかなりの相違があるが、一曲の趣向に影響する様な大きな違いは無い。簡潔な金春流の文句に較べると、観世流のセリフは、ワキの名乗りに前シテのサシ謡と重複する文句があるなど、説明的であり過ぎるようだ。

葛城　この曲の古写本としては、有名な青表紙本に拠つて、天文二十三年(四百二年前)に観世小次郎元頼が節附した本が最古であろうが、残念ながら校合する暇がなかつた。室町末期筆写と推定される天理図書館蔵の古写本では現在の詞章と殆ど相違が無く、観世流の葛城の詞章は比較的早く固定したらしい。金春流謡本としては、宝山寺所蔵の金春喜勝及蓮(天正十年奥)自筆本が最古の本であろう。諸流の詞章を比較すると、細部の相違は数多あるが重要な違いは無い。

申楽談儀の末には後人の加筆で、永正十一年南都雨悦びの能の番組が附載されている。その中に「……クマサカ、カヅラキ(ユウレイ)、藤戸……」とあつて、葛城が演じられた事が知られるが「ユウレイ」と肩書があるので、葛城は葛城賀茂(白主)と区別する為に、別名を幽霊葛城と言つたのであろうと考えられていた。同名異曲の一方が幽霊能、一方が現在能である際には幽霊鵺と現在鵺の様に、上に幽霊・現在の名を冠して区別する方法が屢々取られているが、白主と葛城とは現在と幽霊の関係とは考え難い。又葛城賀茂と区別する為には雪葛城の別名が用意されており、どうもおかしいと思つていたら、これは吉田東伍博士の世阿弥十六部集の誤植であり、先印のパンフレット本申楽談儀によると、「ユウレイ」の肩書は「クマサカ」の方に附せらるべきものであつた。熊坂ならば、現在物の熊坂(烏帽子折)に対して幽霊熊坂の別名を用いる事は、ごく自然であろう。従つて葛城に幽霊葛城なる別名があつたと考える事は、その必要が無くなつた訳で、幽霊葛城は誤植によつて生れた、まさに幽霊的な曲名であつたのである。

附記。表題の「百百」は法華五部九巻書から借用した。滔々たる迷論の時は「トウトウ」と読み、堂々廻りの議論の時に「ドウドウ」と読んで頂けば結構だ。毎月の能について詞章の変遷やら古謡本の事やら、あまり表立たぬ事を書続けて行きたいと思つているが、いつまで種が続くか危いものである。

(大晦日)